

追悼 山岸宏光会員

本会（非特定営利活動法人 北海道総合地質学研究センター）の正会員で理事であった山岸宏光会員は2021年6月3日に急逝されました。山岸会員の本会への多大な貢献を偲んで、追悼ページをもうけることとしました。ここに深く哀悼の意を表します。

総合地質編集委員会 宮下純夫

追悼：山岸宏光さんの思い出

前田仁一郎（北海道総合地質学研究センター）

山岸さんに最後にお目にかかったのは、4月25日に札幌エルプラザで開催した北海道総合地質学研究センターの通常総会と会員交流会の席上でした。そのときはいつものように大変お元気でしたので、6月4日の朝に受け取った訃報は俄には信じられず、誤報ではないかと疑ったくらいです。しかし、大変残念なことにその情報は正しかったのです。山岸宏光さんのこれまでのお付き合いに感謝し、心からご冥福をお祈りいたします。以下、山岸さんの思い出などを記します。(2021/07/18)

山岸さんと最初に会ったのは、僕が北海道大学理学部地質学鉱物学科の卒業研究で教養地学の研究室に所属した頃なので、1972-3年頃、もう50年ほど前ということになる。教養部地学教室の広い学生実験室で行う研究室の忘年会（院生・学生が前日から総出で鍋やなんかを用意する）には決まって大勢のOBも参加し、山岸さんも常連だった。みんな（総勢30人以上はいたと思う）深夜まで大騒ぎをした事を良く覚えている。宴が盛り上がってくると、山岸さんの情感たっぷりのベサメムーチョが出る。教養地学忘年会の恒例の出し物だった。山岸さんも、僕らもはまだみんな若者だった。

当時勤務されていた北海道立地下資源調査所が1978年に中島公園から教養部の直ぐ近くに移転したこともあり、山岸さんは普段でも河内晋平さんのところや院生部屋に頻繁に立ち寄っていたと思う。山岸さん自身が自分の研究の話をしたり、我々も遠慮することなく議論の相手になってもらった。当時の理学部地質学鉱物学科の教養地学の研究室の特徴は、年齢や立場、内や外、その他、どんな違いがあっても大変フラットな人間関係が卓越しており、権威主義的な雰囲気は（極く一部を除いて）全くなかった。こういった雰囲気が、当時の院生・学生の成長の大変大きな背景となっていたことは間違いない。

その後、1999年に山岸さんは新潟大学に移られ、研究分野もほとんど重なっていなかったの、お会いすることは極めて稀になった。2010年に新潟大学から愛媛大学に移られ、そこを退職された2013年に札幌に戻ってこられたので、また大学や学会行事などでお会いすることが多くなった。山岸さんは相変わらずエネルギーで、気さくに硬軟取り混ぜた、実に率直なアドバイスをしてくれて、僕もずいぶんと会話を楽しんだ。

2016年3月に北海道大学を完全退職した僕は、旧教養地学の研究室で同期であった嵯峨山積さん（道立地下資源調査所から改称した北海道立地質研究所を、やはり同時期に完全退職した）と前年から構想を練ってきた特定非営利活動法人北海道総合地質学研究センターを、多くの友人たちとともに設立し（2016年3月1日）、山岸さんも参加された。設立当時の会員は研究・教育・実務において、いわば地質学のプロであった者ばかりで、北海道総合地質学研究センターの設立目的は、退職後も、様々な創造的活動を退職後も意欲的に継続できる環境をつくろう、これまでに培ってきた地質学に関する専門性で今後も社会に貢献できる環境をつくろうということだった。

理事長になった僕は山岸さんから「もう研究を止める気なのか？」とたずねられ、「いやいや、北海道総合地質学研究センターの中で研究を続けますよ」と答えたのだが、その後現在まで、ほとんど研究らしい研究は出来ない状態が続いている。あちこちでこういった組織を見てきた山岸さんの読みの通りだったのだろう。仲間内の仲良し組織とは異なり、NPO法人の運営は、ほとんど毎日のフルタイム作業を要するものだった。経験ゼロからの出発なので、

具体的に何をするのか、それを考えること、それ自体が理事長の大きな課題だった。素人の手探り・試行錯誤の繰り返しだった。良く段取り 8 割などというが、ほとんど段取り 9 割 5 分位だったと思う。何もしないと有名無実になってしまうし、ましてや何か実行して社会的に認知される存在となり、当初の目的に向かって前進するには大変多くの時間とエネルギーが必要なことに、僕は直ぐに気づかされた。

とにかく専門性で社会貢献を、そしてあわよくば参加費収入を得て... というこで、市民向けの公開講座を実施することにし、まずは身近な自然災害をテーマにと考え、山岸さんに相談した。山岸さんは大いに乗り気になってくれ（僕らのおぼつかない運営に、無理してでも協力するつもりであったことは間違いない）、2018 年 5 月から 9 月まで、全 6 回の連続講座「地形・地質から北海道の自然災害を考える－北海道で起きている自然災害の状況と、自然災害の犠牲にならないための基礎知識を学ぶ－」を開講することになった。たまたま近くの区民センターで北海道教育委員会の「道民カレッジ」のパンフレットを見つけたので、その連携講座の指定をもらい、一般社団法人北海道地質調査業協会、札幌市と札幌市教育委員会の名義後援ももらった。札幌市役所の記者クラブに投げ込みのプレスリリースもした。月 1 回の連続講座なので、山岸さんも体力的に相当大変であったはずである。無理をして、僕たちの無理を聞いてくれたのである。ちょうどこの期間に西日本の豪雨災害や北海道胆振東部地震もあって、講座会場でテレビ局や新聞社の取材を受けることにもなった。山岸さんが担当してくれたこの一連の公開講座が僕らの大きな実績となり、2019 年度に「札幌市市民まちづくり活動促進助成」で「札幌市とその周辺の地質に関する市民向け公開講座の実施事業」として採択された。ついに助成金を得るところまで来たかと山岸さんは大いに喜んでくれた。2019 年 4 月から札幌市市民活動サポートセンターが運営する札幌エルプラザビル 2 階の事務ブースを確保できたことも大いに喜んでくれたし、なによりも素人集団が作った NPO 法人が有名無実・雲散霧消せずに維持されていることを、たいしたもんだと積極的に評価してくれた。今思うに、NPO 法人の運営の大変さについて、最初から本当にわかっていたのは山岸さんだけだったかもしれない。だから、法人の永続的維持のためには、できるだけ早く役員報酬や役務の有償化の実現を、というアドバイスもくれた（未だに実現していないが）。北海道地質調査業協会との橋渡しをしてくれたのも山岸さんだった。山岸さんは間違いなく設立直後の北海道総合地質学研究センターにとって最大の貢献者だった。

2020 年初めから新型コロナウイルス感染症の拡大が始まり、大変残念なことに公開講座の実施も、また「札幌市市民まちづくり活動促進助成」申請も不可能となり、エルプラザ内の事務ブースも有効に利用することが難しくなった。この先もまだ不透明である。設立から 5 年が経過した北海道総合地質学研究センターも、これから正念場を迎えることになるだろう。改めて山岸さんの存在感の大きさを思う。山岸さんがいてくれたら何て云うだろうと、これからも何度も思うに違いない。山岸さん、これまでの長いご厚誼と北海道総合地質学研究センターに対する多大なご貢献に心から感謝します。でも、正直なところ、まだ実感がない。直ぐにどこかでお会いできるような気がしてならないのだ。

山岸宏光さんへの追悼の言葉

松田義章（北海道総合地質学研究センター・北海道教育大学非常勤講師）

山岸宏光先生（以下、失礼ながら山岸さんと呼ばさせていただきます）の突然の訃報の悲報に接し、絶句し言葉もございません。

山岸さんとは、私が大学を卒業して、中学校の新米教師をしながら、出身地であり、また中学校の勤務地であった小樽～積丹半島の地域地質の研究を始めようと思案していたときに、まず、1977 年当時出版されたばかりの「札幌の自然を歩く」（地団研札幌支部編）の「11 章、小樽、積丹の火山噴出岩」の執筆者として出会いました。この本には、水底火山噴出物としての「ハイアロクラスタイト」について記述しており、山岸さんはこの用語に「水冷破砕岩」という訳語を初めて提唱されました。今まで、この種の岩石には、一律に「集塊岩」という岩石名で一括していたものを、その成因を考慮して命名された画期的な訳語だったと鮮明に記憶しています。その後、山岸さんが主宰されていた積丹団研に入れていただいて、いろいろな研究テーマを頂いたり、積丹半島のフィールド、さらに青森県の下北半島のフィールドを共に調査させていただき、露頭の見方について懇切丁寧に指導していただくという幸いに恵

まれました。このころ(1973年)、山岸さんは、日本火山学会の学会誌である「火山」等に「新第三紀中新世の水中溶岩の一例」(火山第2集18巻第1号)を始めとする水中火山岩に関する画期的な論文を矢継ぎ早に発表されていて、その成果は、5万分の1地質図幅および同説明書「余別および積丹岬」や「神恵内」等の一連の地質図幅とその説明書の内容にも盛り込まれています。なお、積丹団研の研究成果は、日本地質学会の地質学論集第16号に「積丹半島西南部の地質と火成活動—とくに層序とハイアロクラスタイトについて—」としてまとめられています。また、これらの研究成果は、実質上の学位論文である"Studies on the Neogene subaqueous lavas and hyaloclastites in southwest Hokkaido." Rept.of Geol. Surv. Hokkaido.No.59に集約されまとめられています。私とのつながりとしては、1991年に"Neogene submarine felsic rocks at Yoichi Beach, Shakotan Peninsula southwest Hokkaido, Japan." Jour. Geol. Soc. Japan."vol.97を、共著者としてまとめさせていただきました。山岸さんは、巡検案内の達人として、多くの学会や研究会において巡検案内者を務められました。特に1992年の京都で開催されたIGCにおけるポスト巡検であった「北海道の水底火山活動」や、1994年に北海道大学で開催された日本地質学会第101年学術大会でのポスト巡検「小樽・積丹海岸の水中火山岩」では、松田もお手伝いさせていただいて名案内者の名解説で面目躍如たるものがありました。山岸さんは、その後、北海道立地下資源調査所から転出し、新潟大学や愛媛大学の教官として研究と後輩の育成等の教育等に従事され、さらに日本地すべり学会の会長等も務められています。上記の大学を停年によりご退官後は、故郷である札幌に戻られて株式会社「シン技術コンサルタント」の技術顧問を務められておりました。最近では、NHKの人気番組「ブラタモリ・室蘭」にも出演され、そのことがご縁で室蘭市や北海道胆振振興局ともつながりができて、特に、北海道胆振振興局からの要請で「室蘭・絵鞆半島の海上巡検」の講師を引き受けられ、私も助手としてともに案内役をさせていただきました。その際、札幌と室蘭を往復する高速バスの車中でも常に有益なご助言を賜りました。それらのご恩に対して何もお返しをすることもできぬままお亡くなりになってしまい、哀悼の念とともに、私の「実質上の恩師」を失った途方もない空虚感に苛まれております。山岸さん、今まで本当に懇切丁寧なご指導、有り難うございました。また、今後とも天国からのご指導をお願いします。安らかに眠り下さい。心よりご冥福をお祈りいたします。

20210603 山岸宏光氏 追悼

関根達夫（北海道総合地質学研究センター）

2003年6月に最終間氷期勉強会で「豊平川沿いに札幌の深層地盤をさぐる」札幌市内巡検を開催しました。巡検説明書の準備のため豊平川周辺の文献を収集しているときに山岸・香河(1978)「豊平川流域の河岸段丘-そのテフラによる検討」に出会いました。

論文中の「豊平川中流部の段丘縦断投影図」で豊滝～小金湯付近の段丘面がほぼ平らになっているのを見て「古藤野湖」の存在をイメージしました。

新札幌の事務所に通っていた頃、1ヶ月に1回ほど平岸プールに泳ぎに行くと、時々、山岸さんが平泳ぎをしているのを見かけました。

写真測量学会やGISのセミナーに参加すると、山岸さんにいつも会いました。「地質屋もGISを使わなきゃ」といつも言っていました。

総合地質学研究センター(HRCG)の設立当初から一緒に参加していました。

2018年7月22日に、北海道地理空間フォーラム in 札幌主催の、「さっぽろ巡検」のために地質見学会の案内書を作成しました。フォーラム見学会の担当に「真駒内付近の現地は関根が詳しい」と紹介したのは山岸さんでした。

2018年10月16日～17日に「日本応用地質学会研究発表会」が札幌市教育文化会館で開催され、水中火山岩研究会のメンバーが集まるので、10月18日の藻南公園地質巡検に協力を依頼されました。見学会案内書は、上記の「さっぽろ巡検」案内書の表紙だけを書き換えて使いました。巡検当日は藻南公園の豊平川河床で、山岸さんから水中火山岩の講義を受けました。

2020年HRCGの研究セミナーで古倶知安湖の調査で、軽石層の斜層理を説明すると、それは、「水中火山岩

1994」に掲載しているよとコメントをいただきました。

「水中火山岩」写真集の最後 154 ページに傾斜方向は反対だけれど、倶知安土取場で撮影したものと同様の斜層理が掲載されていました。「洞爺カルデラに由来する陸上軽石流の湖に堆積した二次堆積物で foreset bed と topset bed からなる（倶知安町）」

2021 年 4 月 21 日の日本応用地質学会北海道支部・北海道応用地質研究会の特別報告会「いま地形から何が分かるか？」田中 富男氏が講演しました。田中さんの研究の出版を支援するために HGMM（北海道ジオモルフォメトリック研究会）が 4 月 21 日に正式に発足したので、山岸さんから私に Q G I S の利用で会への参加の依頼があったので承諾しました。5 月上旬に、第 2 回目研究会の日程（6 月中旬）と会場設定を依頼するメールがありました。

6 月の研究会で会うのを楽しみにしていたのに、突然の訃報（6 月 3 日）でした。

まだまだ、いろいろとお話聞きたかったのに残念でなりません。

山岸さんの御冥福を心よりお祈りいたします。

山岸宏光さんにお世話になったこと

岡村 聡

山岸さんとの出会いは、今から 40 年以上も前のこと、私が修士課程で寿都半島を地質調査していた頃だった。当時、新潟大学に在籍していたが、北海道でお世話になったのは、地下資源調査所と北大の教養地学だった。教養地学では、岩石学の手ほどきを受け、キレート滴定や北海道農試での蛍光 X 線分析など、宮下純夫さんらのご指導を受けた。一方、地質調査は、学部時代は火山灰をテーマにしていたので、本格的な地質調査は寿都半島が最初だった。当時、新第三系火山岩類は、調査対象が鉱床を主目的としていたこともあり、グリーンタフと総称され、局所的な鉱化作用も多々あるなど層序対比にも混乱が見られた。ましてやそれらの産状や定置環境の検討はほとんどなされていなかった。しかし、寿都半島を含め、道南の火山岩類にはきわめて新鮮で変形も受けない岩石も多く、噴出環境を推定するのに適したフィールドも多かった。そのことにいち早く注目していたのが山岸さんだった。山岸さんの研究は、忍路の枕状溶岩のみごとな産状を世に知らしめたのを皮切りに、島弧火山岩が示す多様な水中火山岩の産状を独自の視点で記載分類し、R. Cass（モナッシュ大）らとの共同研究など国内外で注目されることになる。

私が調査を始めた頃、山岸さんは既に積丹半島の広域にわたって、地質図幅のための調査を進めておられた。職場に山岸さんを訪ね、教えを請うた時、寿都半島から歌棄にかけたルートマップや火山岩の産状写真・スケッチを見せていただき、初めて知る水中火山岩の産状の多彩さに大きな衝撃を受けたのが、つい昨日の事のように思い出される。その後、私は寿都半島の公表論文で、山岸さんがまだ未公表であった成果の一部を引用させていただいた。口頭でお願いしたことでもあり、後日、ご本人から、許可した覚えはない、とお叱りを受けた。この顛末は、第一著者として初めて論文執筆した頃の苦い経験と教訓であったが、今となっては懐かしい思い出である。

話は一気に最近の出来事になるが、昨夏、寿都町と神恵内村の高レベル放射性廃棄物受け入れ問題がマスコミに流れた。寿都町がこのような問題で全国ニュースで紹介されるなど、全く寝耳に水の心境だったが、周囲から「お前の出番だ」と言われ、にわかに核ゴミの地層処分問題に関わることになった。その際、相談相手として真っ先に思い浮かんだのが山岸さんだった。もう一人は、かつて幌延で同様な問題について、地質屋の立場から情報発信していた岡

孝雄さん。お二人からは、地層処分の問題点や図面類の提供など懇切丁寧な情報提供を受けた。特に、寿都と神恵内両地域の図幅調査に関わった山岸さんからは、地質的なコメントをいただき、さらには、地層処分政策にまつわる関連情報を教えて下さった。道南各地で見られる水中火山岩の、貴重な地質遺産的価値を訴えてきた山岸さんの嘆きが、私に伝えられた最後のメッセージであった。この問題は、日本全国を巻き込む社会的政治的問題として、今なお継続している。

まだまだ、多方面にわたってご活躍が期待されていた山岸さん。あまりに突然のご逝去に残念でなりません。心よりご冥福をお祈りいたします。

山岸さんを偲んでー出会い再会そして別れー

嵯峨山 積

2021年6月3日に亡くなられた山岸宏光さんは、北海道大学理学部地質学鉱物学科卒業後、1966年に北海道立地下資源調査所（以下、調査所）鉱床地質部に就職されました。1968年に地質部に移動し、1981年に工学地質科長、1982年に表層地質科長、1988年に開発応用部の資源工学科長、1990年に環境地質部長、そして1999年に新潟大学教授として転職されました。山岸さんとの出会いは1974年の私の入所時で、彼が表層地質科長だった6年間はただ一人の科員としてお世話になりました。

山岸さんは、大学4年生の卒業論文では日高の堆積岩を調査したと言っていましたが、調査所では主に火山岩を対象としていました。私とは専門は異なりますが、第6講座（教養部）出身や大学院の経験がない学部卒業という共通点で親近感がありました。論文作成経験が無い就職当時の私は、山岸さんから文章や図の書き方などを教えてもらいました。

山岸さんは多くの論文を公表し、勝井先生指導で論文博士として北海道大学より学位を得ています。表層地質科当時は博士論文をまとめている最中で、「まだ英語論文が足りない」とつぶやいていた事を覚えています。

私が調査所に就職した年に、山岸さん宅にお邪魔したことがあります。公宅は中央区の西何条かは忘れましたが、一人娘の美和ちゃん（2歳？）が「やまぎしみわです」と挨拶し、その愛らしい仕草を見て微笑んでいた山岸さんの顔が昨日の様に思い出されます。

仕事では、5万分の1地質図幅「茶内原野」と調査所の海洋地質部門の設置で力を貸していただきました。前者では松下勝秀さんと共にまとめることが出来、後者では長谷川潔さんや高橋功二さんも含めて検討し1996年の海洋地学部設立（小樽市築港）に至っています。表層地質科の1年目には、私の珪藻分析習得のための国内研修（1982年、大阪大学教養部）もありました。

山岸さんが別部署に異動した1988年以降は、仕事上の接点はまったく無く、山岸さんの大学勤務時も交流はありませんでしたが、2016年のHRCG発足後はメンバーとして再び親しくさせていただきました。山岸さん講師の第2回公開講座「地形・地質から北海道の自然災害を考える」（2018年）は、6回シリーズのためチラシの印刷・配布、参加者の受付など、大変でしたが貴重な経験となりました。HRCGロゴマークも山岸さんの提案です。

ある研究セミナーの会場で、「癌の検査をしなければならない」と聞かされましたが、まだまだ元気と思っていました。携帯電話での最後の会話は5月7日、最後のメール交換は5月15日で、それから20日たらずの訃報でした。大きな体と特徴ある声の山岸さん。やり残したことが沢山あり、無念だったでしょう。78年間、お疲れ様でした。今も白石の自宅で論文完成のために精を出している様な気がしています。



HRCG 第7回研究セミナー講師の山岸さん
(2018年2月3日、札幌市中央区かでの2, 7)

追悼 山岸宏光先生へ

荒川昌伸（北海道総合地質学研究センター，登別市在住）

山岸先生は2017年11月にNHKのブラタモリで室蘭の絵鞆半島の海岸線に連続する断崖の地質を解説されました。室蘭八景のなかでも絵鞆半島は新第3紀層の地質景観がその半分を占めるエリアです。しかし、室蘭は昭和28年の地下資源調査所発行の5万分の1地質図幅「室蘭」が出版された時代からほとんど新たな研究がなされていない地域でした。

しかし、山岸先生はブラタモリで室蘭の地質を新たな視点から見直してくださり、「水冷破碎岩」など水中の火山活動のダイナミズムを一般の視聴者にも大変わかりやすく伝えてくださいました。これがきっかけで、室蘭市民が室蘭の地質的な成り立ちに興味を持ち、山岸先生のファンになると同時に地学のファンも増えたと感じています（写真は2018年8月ごろ、ブラタモリの航路を観光に活用するための試験航海で山岸先生が室蘭の地質を解説しているときの写真です）。

山岸先生は快活で気さくなお人柄で、お話が楽しく、初対面の方でもお話にひきこまれる魅力を持っておられます。私も先生に出会って数年ですが、私の自宅の地質の基盤は山岸先生が名付けたという「水冷破碎岩」の上になります。そのよしみか、こんな素人の私にも電話やSNSを通じて常にアドバイスや地質の情報を教えてくださいました。また昨年、山岸先生は私に「断崖の地質を観察したい、だれかドローンを操縦できる人はいないだろうか？」といわれたので「大丈夫です」と答えて、ひそかにドローンを購入し、撮影の練習をしていました。コロナが落ち着いたなら是非、ドローンを活用して調査のお手伝いをさせていただき、室蘭周辺の地質のことについてもさらにご助言をお願いしようと考えていた矢先に先生がこんなにも早く急逝されたと聞いて本当に残念で仕方ありません。

山岸先生は2019年に地学雑誌に「景観としての水中火山岩—室蘭市絵鞆半島の外海岸急崖の産状」という研究報告を残してくださいました。ブラタモリで解説した室蘭の水中火山岩にまつわるレポートです。室蘭半島の景観を愛する者の一人として、山岸先生がこのような室蘭地域で研究されたことに心から感謝の気持ちを伝えさせていただきたいと思います。本当にありがとうございました。そして心からご冥福をお祈り申し上げます。



道立地下資源調査所時代の山岸宏光さんのこと

岡 孝雄（株式会社北海道技術コンサルタント）

記憶は定かではないが、山岸さんの存在を知ったのは大学2年目（1968年）の時に地学同好会「シュマの会」に入り、「シュマの会の提案者は山岸宏光さんという人である」と知らされた時のことだと思う。理学部地鉱へ移行して、その山岸さんが道立地下資源調査所の人ということで、本人の顔を拝見したのは地団研札幌支部の会合か何かであったと思う。しかし、あの頃は1969年を頂点とする北大紛争（あるいは北大闘争）の最中で自分自身も周囲も大変な時であった。

紛争も落ち着き、大学院修士課程に進学した私に、地下資源調査所の研究員にどうかという話が2年目（1973年）になって浮上し、大学院を8月末で中退して、9月から同調査所の研究職員（道職員）として勤務することになった。それ以来、山岸氏が新潟大学に転出する1999年までの25年程の期間、同調査所で付き合いことになった。私は層位系で、主に流体資源部門（天然ガス・地下水・温泉）に所属したが、山岸氏は岩石・鉱物系で地質部に所属し、その後の機構の改組・改変はあったが、仕事上は同じ部・科に所属することはなかった。地方の試験研究機関の恵まれ

ない条件の中でも、勉強家でアイデアマンの彼は好きな語学（英語）と地形学的手法（空中写真判読など）を武器に、活断層・地すべりなどの課題にも取り組んでいた。さらに、積丹半島などの地質図幅調査を手掛けたことから、当時、集塊岩と一括されていた水中火砕岩を体系付け、国内的に限らず国際的な評価も受けたことは特筆に値するものであった。彼のチャレンジは地方の研究機関の我々にも研究者として大成することが可能ではないかと方向を示してくれるもので、あこがれの対象となっていた。私個人、結果的に山岸氏のように日本的・国際的にはばたくことはかなわなかったが、彼の行動に刺激を受け、彼がまだ地下資源調査所にいた頃に、海外の地質（ニュージーランド・オーストラリア・サハリン）を見聞し、その結果も含めて、「北海道の平野・盆地の成立過程」としてプレート論を下敷きに学位を取得できたことは大変な成果だったと思っている。

山岸氏は、そのまま地下資源調査所にいれば所長にもなれるのではないかということも言われ、本人も多少そのように思っていたこともあったかと思うが、企画課（企画課長）を経験しなければ、そんなことはないとの慣例どおり、その方向はなく、彼なりに活躍の器（地下資源調査所）に見切りをつけ、新潟大学理学部自然環境科学科教授へと転身することは必然的な結果でもあった。

山岸氏が地下資源調査所にいる頃の研究部長になる前に、職場組合（全道庁地下資源調査所支部）の支部長と書記長に選出されることがあり、機構改変について当局（所理事者・所管の商工観光部）とのやり取りの中で、支部長（山岸氏）が当局の方向付けに沿って動き、書記長（岡）以下の執行部がそれに反対し、結果的に書記長の私が前面に立って、当局と交渉し、要求案を認めさせるという出来事があった。その後で、彼が後進の我々執行部に涙して謝っていた人間的な姿が思い出される。その後、山岸氏は環境地質部長になるのだが、組合執行部でのことは、彼に精神的に頼ってきた後進の我々の自立の切っ掛けとも言えるものであった。そのことも、彼のその後の転進に結びついたかもしれないと思っている。突然の死去の知らせは色々縁があっただけに、ショックであった。山岸さんの死は「老兵いつまでも時間はないぞ」と知らせる早鐘のようにも思える。…………… 合掌

山岸宏光さんを偲んで

田近 淳（一般会員）

山岸さんが突然亡くなられた。まさか、日本地すべり学会国際賞の受賞が決まり、夏の札幌大会の授賞式でお会いできると思っていたのに、あんなに元気だったのに、亡くなられる数週間前に道総研に業績論文集を寄贈したばかりだったという。

私は多くの方々に様々なご教示をいただいたが、なかでも大きな影響を受けたのが山岸宏光さんだ。私は山岸さんの一まわり下の午年だ。1979年に北海道立地下資源調査所に勤務したとき、山岸さんは気鋭の研究員だった。1999年に山岸さんが新潟大学に転出するまで同じ建物の中で暮らした。ただし、直接部下になった期間は後半のごく短い期間だけで、「教え」を受けたのはほとんど、20代の若いころの野外調査や出張中の宿や飲み会でであった。若いころはずっと、当時山岸さんの部下だった岡村俊邦さんや遠藤祐司さんがうらやましかった。

入所1年目ぐらいだったと思う。北海道内の地質図幅調査が終了したあとの研究課題を探索する旅？というのが企画された。私は山岸リーダーについて、同じく入所1～2年目の岡村俊邦さんと釧路から中標津、知床の1週間の旅に出かけた。厚岸の採石場で、大きなラグビーボールのようなピローを観察。殻の一部がパクリと割れて中から溶岩が割れた殻を押し出している。養老牛温泉近くの牧場（今考えると標津断層帯）で撓曲崖の観察、摩周・屈斜路のテフラの観察など、新人にとっては皆面白いものだった。おどろいたのは、それらがみんな後日何らかの形で論文や報告になったことだ。見つけたことはすぐに書く。教えその1だ。

露頭では、しばしば様々な現象の解釈を聞かせていただいた。ウトロ付近ではハイアロクラスタイトの成因、渡島帯の緑色岩の露頭では玄武岩角礫に遍在する気泡の成因について滔々と語られた。露頭で多くの情報を読み取り、語る。教えその2である。その山岸さんが、言葉に詰まったのを1度だけ見たことがある。1986年大口健志先生らの主催で男鹿半島で火山噴出物巡検があった時のことである。球状の溶岩、塊状溶岩、火砕岩のサクセッションが見える露頭で、中村一明先生が「山岸君、これはピローかね。どうしてパホイホイではいけないの？」

図幅調査などの宿や往復の車中では、学卒のご自分が学位を持つ先輩たちの中でいかに勉強をして、論文を書けるようになったかを語り、大学院中退の君たちも学位を目指して頑張れ、という叱咤激励を受けた。アメリカ研修や中央アジアの地すべりなど海外の話も大変刺激になった。もし、そういった刺激がなければ、今こうした私は存在しなかったかもしれない。自然に山岸さんの真似をして追いかけるような環境を作っていたのだなあと思う。

私が地すべりに関するテーマで学位論文を提出したときは、大変喜んで下さり、発表の後で「たいへい」でお祝いをしてくださった。不思議なのは山岸さんとあまり地すべりについて議論した覚えがないことだ。「北海道の地すべり地形」をまとめるお手伝いを少ししただけで、私は重箱の隅をつつくようなことばかりしていたので、議論にならなかったのかもしれない。何年前か、ある地すべり関係の講習会の講師を務めたとき、山岸さんも本州の同じ講習会の講師を務められていて、そのテキスト（PPT）を見てびっくりした。その内容は私のものと骨格と流れがほとんど一緒だった。このとき私は山岸学派だったんだということを改めて感じた。山岸さんが私に最初に示してくださった地すべりのテキストは Varnes (1978) だった。



ヒロエと山岸宏光さん

山岸さんのキャラクターを悪く言う人はあまりいないと思う。地すべり学会北海道支部研究小委員会や北海道火山勉強会などたくさんの研究会を作った（そしてつぶしもした）。朝からかけまくる電話魔でもあった。飲み会の予約を忘れてしまって、飲み屋の親父がカンカンになった（でも許してもらえた）。あのベサメムーチョはもう聞くことができない。地下資源調査所の組合の書棚を整理していた時、なぜか山岸さんの大学時代の私小説風日記が出てきた。冬の？羽幌線をひとり旅する男の物語だった。ロマンチックな一面を見た気がした。山岸家の歴史もよく話して下さった。鳩山農場の話、栗山からの夜逃げの話など、面白い話がいっぱいだった。

20年近くも一つ屋根の下にいと楽しいことだけではなかった。地下資源調査所が定員削減で揺れたことがあった。私は組合支部のヒラの執行委員で山岸さんが支部長だった。今考えると、あの頃は山岸さんが一番つらい時期だったのかもしれない。こんなに早く亡くなられてしまったので、その頃の無礼を詫びることもできなくなってしまった。

山岸さんはその後新潟大学に移られ、日本地すべり学会会長になり、地すべり GIS では世界的業績を上げられた。なかでも私が一番よかったなと思うことはたくさんのお弟子さんをつくられたことだ。毎年お弟子さんたちが集まる「山岸研の会」で楽しそうに歓談されていた。

最後に電話やメールで山岸さんとやり取りしたのは昨年末の防災科学技術研究所土砂災害シンポジウムの前後だった。胆振東部地震の地すべり GIS について質問するとすかさず返事があり、わからないことはすぐ自分でやってみてお返事をくださった。はやく英語で論文を書きなさい、楽しみにしているというのが最後の言葉だった。

山岸さん、山岸学派は道総研や新潟大学・愛媛大学そして海外のお弟子さんたちが受け継いで発展させてくださることでしょう。私もお約束を果たすように努力したいと思います。安らかに眠りください。讃美歌 312 番を歌っておくりさせていただきます。

「水中火山岩」の研究成果を活かしてまいります

「水中火山学」出版編集委員 坂本 泉, 松原典孝, 鈴木 聡

「水中火山岩研究会」会員 一同

山岸宏光先生、私たちは先生が研究、執筆された水中火山岩に関する多くの論文や本の内容、そして研究に関する熱意やお人柄に影響を受けた、いわば先生のファンクラブのメンバーであり、先生の突然の訃報に接しまして、驚きと悲しみに打ちひしがれています。

山岸先生は積丹半島の調査をしていたころ、陸上火山の用語であった「集塊岩」を火山学的に検討して“水冷破碎岩”を初めて使われました。その後、水中溶岩やハイアロクラスタイト（水冷破碎岩）に関する論文を数多く発表され、その集大成である「水中火山岩—用語と解説」を出版されました。

また、先生の水中山火岩研究は、国内外の新生代テクトニクスやオフィオライト、海底火山などを対象とした地質や火山研究分野や、黒鉱鉱床や石油貯留岩等の資源地質分野、岩盤崩壊やトンネル、ダムなどの応用地質分野、ジオパークなどの景観資源分野の研究や実務などの基礎となり、貢献されました。これらの集大成として2020年秋からは「水中火山学」の出版にむけ、先生が編集の先頭となって我々編集委員を引っ張っていただきました。

また、先生を中心とした「水中火山岩研究会」を2015年に立ち上げ会員は30名以上となり、第一回の研究集会を札幌の藻南公園で行いましたが、先生を囲み水中火山岩に関して露頭観察などを行いながら解説を受けたり意見交換したことは、誠に楽しく有意義でした。

ところが先生は我々を置き去りにして、突然あの世に旅立って行かれました。これからは、「水中火山学」出版の編集や「水中火山岩研究会」の活動を導いていただくことができなくなることを思うと耐え難い苦痛です。しかし、私たちは先生の意志を引き継ぎ、「水中火山学」の出版と「水中火山岩研究会」の発展に努めてまいります。山岸宏光先生今までありがとうございました。そしてさようなら。



水中火山岩研究会研究集会での集合写真（2018年10月 札幌市藻南公園にて）

山岸宏光さんを偲ぶ

宮下純夫

山岸宏光さんは1942年12月生誕ですから私よりも4年先輩で、高校も同じなら（札幌南高）、北大でも同じ教養地学教室でした。私が卒業論文で教養地学教室に所属したときには当時の北海道地下資源調査所に赴任されており、高校でも大学でもすれ違いでしたが、私の卒業論文のフィールドが山岸さんの手がけていた5万分の1地質図幅「糠平」の中にあったこともあり、山岸さんの人夫として雇われ、ウペペサンケ山や糠平湖の周辺を一緒に歩き回りました。山岸さんの採取されたサンプルを担いで歩いたことを思い出します。それが最初の本格的な出会いでした。

私は教養地学教室には卒論で2年、修士課程3年、そして博士課程では6年プラスアルファで結局15年前後も在籍していましたが、忘年会などのコンパには山岸さんは毎回参加していました。当時の地学教室のコンパには、教養地学の非常勤講師を務めていた関係で、岩見沢教育大の秋葉 力先生や東海大学の石井次郎先生、開拓記念館の北川さんなども参加されていました。そんなわけで当時のコンパは人数も多く賑やかな会でした。山岸さんは興が乗ってくるとベサメムーチョを熱唱し、それはそれは見事な歌いっぷりで、いつも大喝采を浴びていました。

私は新潟大学理学部地質科学科に赴任しました。理学部に新しい総合的な学科として自然環境科学科が設立されますが、地質科学科から移動した教員の後任の教授として山岸さんが1999年に赴任されてこれ、またまた付き合いが始まりました。私の当時の研究室に時折ふらっと現れ、コーヒーを飲みながら自然環境科学科の地質系の教育や研究などに関して、色々な話をしていました。当時の自然環境科学科の一部の地質科教員が反プレートテクトニクスの立場で、勉強会には日本海陥没説の本を用いていることに驚くとともに、学生たちがかわいそうだと話していたことを思い出します。2004年に新潟県中越地震が発生し、新潟大学の建物も大きく揺れましたが、中越地方では甚大な被害が発生し、新潟大学の自然科学系の研究者を中心に調査団を結成して被害調査に当たりました。私は調査団の事務局長として全体をまとめることとなりました。その成果は新潟大学中越地震調査団と新潟大学が共同で発行した「新潟県連続災害の検証と復興への視点-2004.7.13 水害と中越地震の総合的検証」としてまとめられており、山岸さんは斜面災害に関して新潟大学の関連研究者と共同して調査報告をまとめています。

山岸さんは斜面災害や自然災害研究にGISを取り入れた調査・研究を遂行しており、同じ自然環境科学科の故卯田強講師と共に新潟大学GIS研究センターを立ち上げ、センター長として活躍していました。また、新潟周辺には角田山や佐渡に水中火山岩の素晴らしい露頭がたくさんあり、それらを調査していました。山岸さんが主査を務められた博士論文の副査には地質系ということで私が加わることになり、フゴッペの遺跡に関する研究などに関して議論したのも懐かしい思い出です。2008年には新潟大学を退職しましたが、今度は愛媛大学の防災情報研究センターの教授として招聘され、東南アジア諸国での自然災害研究の推進に務めていました。そこでの任期を終えて北海道へUターンして、今度はNPO法人北海道総合地質学研究センターの設立に寄与され、その中心的なメンバーとして公開講座などの諸活動に活躍していました。まさにそんな時期に北海道では初めての震度7を記録した胆振東部地震が発生し、その調査にも活躍されました。思い起こしてみると、新潟へ赴任した直後には中越地震、北海道へUターンした直後には胆振東部地震に遭遇しており、それぞれの災害調査で山岸さんが活躍する場となったのも奇遇でした。私も新潟大学を退職して数年間は研究の継続のために新潟大学で研究室を保持していましたが、2018年には北海道へ戻ってきましたので、またまた付き合いが始まり、昨年には山岸さんの最後の大仕事として水中火山岩の新しい本の出版への執筆を依頼されて、メールをやり取りしている最中でした。そんな折での急な逝去でしたので、本当に驚きました。

山岸さんは水中火山岩の全国的な研究グループを組織しており、山岸さんは最後の仕事として、上記の本の作成に取り掛かっていましたが、その遺志は受け継がれています。

新型コロナ肺炎蔓延のために、多くの社会的活動が制約されており、そのためもあって山岸さんの逝去の経緯は知られていません。折しも北海道では最大の感染の広がりを受けて、医療崩壊の時期の最中の出来事でした。もし、医療活動が正常に稼働していたなら、救えた命ではなかったのかと思っています。新型肺炎は直接的にも多くの命を奪いましたが、緊急医療の崩壊という意味でも間接的に多くの命を奪っていったことを痛感しています。

山岸さんとは本当に長い長い付き合いでしたので、思い出はつきません。合掌。

編集後記

ここに総合地質第5巻をお届けします。今回は山岸会員の追悼ページも含めて掲載が10件にも上り、分厚い号となりました。

本年6月に本会の設立時からの会員で理事でもあった山岸宏光会員が急逝されました。編集委員会では追悼ページを設けることを決めて、会員諸氏からの追悼文を掲載することとしました。この追悼ページには、会員以外からも寄稿されており、山岸会員の多彩な活躍がしのばれます。

石の上にも三年と言いますが、総合地質は君波編集委員長のもとで3巻まで編集されたのち、4巻目からは宮下が引き継ぐこととなりました。当初は電子版のみの発行で、印刷体を想定していませんでしたが、国会図書館などへの収録を考え、印刷冊子も必要ということで、第3巻から印刷体も同時発行するようになりました。また1,2巻も印刷し実費で領布しています。それに伴い、4巻からは印刷冊子を意識したスタイルへ変更しています。

学術雑誌の価値は、定期的に発行が継続されてこそ向上してゆきます。喜ばしいことに、今回も多数の、それも多彩なジャンルの原稿が投稿されました。第6巻に関しては、5～6月頃に投稿を受け付ける予定です。

今回、報告・資料として投稿されたものは、市民向けの見学会の際に用いた資料がベースになっています。今後も同様に用いられることを考慮し、投稿規定とは異なるスタイルとなっています。今後も編集委員会では、そうした多様な資料・報告に関しても、柔軟に対応していきますので、ご相談ください。

新型コロナ感染が収束し、皆様との対面での会合や懇親会なども再開できることを待ち望んでいます。

編集委員長 宮下純夫